

歴史の創造者たち

病院の帰りはどこかの喫茶店で休むことにしている。扉を押して入ると、一人店主らしい婦人がかけよっていすをどうぞとすすめる。初めての店。ふつう喫茶店はこんなことまでではない。「こんな風の強い日におより下さるお客さんですもの」と答える。どの客にも、いつ行っても、変わりはない。ここにはお客への愛がある。わが仕事への愛がある。

別府へ移住して来た妹たちが語る。「愉快的八百屋さんがあるのよ。ほうれん草を買おうと手にすると、きょうは止めなさい、品物が悪い、よそで買って下さいって。品物を選んでみると、これがよいですと一緒に選んでくれる。たしかに良いものを。楽しい店だわ」。この店にも愛がある。仕事とお客への。

あの喫茶もこの八百屋も、私たちには安心できる一流の店、楽しくなる一級品。考えてみると、こうした意味の一級品、一流品なら、私たちの周辺には決して少なくなない。職場に地域に、おつきあいの人たちの中に。直接間接見聞きする全くの他人の中

にも。

この夏の甲子園高校野球にも、ひとそれぞれの一級品の場面があったであろう。

私にとって忘れがたいのはある少年の笑顔だ。準決勝で敗れた浦和市立高の星野投手、味方が愚かなエラーをしてピンチになっても、必ず見せるあの笑顔だ。何という自然さ。作ってできる笑いではない。友を思いやる愛がここにはある。それは、プロ野球で見たことはないもの。子供こそ真の大人。

よく考えてみると、こうした無名の一級品たちがおればこそ、どんな悪政下でも人は希望を失わず、人類の社会は進展に耐えているのである。歴史はこの人たちによって、真実担われている。

大分県の一村一品も一村一流品をめざさねば。愛と倫理の欠落のままでは不毛すぎる。湯布院町の時松辰夫氏が「ミックス」誌九月号で語っている。「何を作るかではない。何のために作るかだ」。

(一九八八年八月三十一日)